

---

# 鬼の森

芙美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼の森

### 【Zマーク】

Z2008W

### 【作者名】

芙美

### 【あらすじ】

人を寄せ付けない、鬼がいるという禍々しい森。冒険に来た少年と少女は、森の奥で祠を見つける。＊＊＊10話くらいで完結の予定

人里から離れた、草木が生い茂り陽の光が届かない薄暗い森の奥に、その祠はあった。

この森は、全体を禍々しさに覆われていた。森を歩くと、草も木もひつそりとした悪意を持ち、ふとした瞬間に襲い掛かってくるような不気味さで、行く手を遮る。

草木をかき分けてどうにか進んでいくと、突然開けた場所に出る。三メートル四方ほどの空間には短い草がまばらに生えていて、頭上を背の高い木が光を遮る為やはり薄暗い。

この中心に、祠が置かれていた。

祠の周辺は夏でもひんやりとして、空気が張り詰め、妖気が漂つているようであった。

祠は何年も何十年も、そこで誰かが来るのを待っていた。

\*

祠に近づく、二つの影がある。

「さとるちゃん、見て！なにがあるよ」

無邪気な子供が冒険に来たのだろうか、祠を前にはしゃいでいる。

「美咲、もういいだろ。帰ろうぜ」

さとると呼ばれた少年はこの森の雰囲気に怯えていたが、美咲と呼ばれた少女は気にすることなく突き進んだ。さとるはしぶしぶついていく。

さとるは不安気に辺りを見ていた。美咲がいなかつたら、全力で走り出していただろう。恐ろしさに叫んでしまいそうだったが、必死にこらえた。

息が苦しくなるほど、押しつぶされるような重く静かすぎる空気。静かなに誰かがいるような気配。少し気を緩めると、それら

が目に見える形で現れるような気がして、さとうは無意識のうちにこぶしを握っていた。

「ドアの前に紙が貼つてあるよ」

観音開きの戸がお札で封印されていたが、まだ小さい美咲はお札の存在を知らず、テープのようなものだと思った。しかし紙には何か書かれていて、それがただのテープではない特別なものだと感じとり、美咲の目はより一層輝いた。

「美咲、もう帰ろう。鬼が出る……。この森は鬼が出るんだって、みんな言つてただろ」

さとうは顔を青くして祠を見た。本当は見るのも恐ろしかつたが、見ておかないと中から何か出てきそうで、目が逸らせない。

「早く帰ろう。ここ、普通じゃない」

震える声でつぶやいた。

さとうとは対照的に、美咲は日常と離れたこの場所に興奮しきつて、引き返す様子がない。

「もうひょっと、見てみよつよ。ちよつとだけ。私中を見てみたいなあ」

いつもの、わがままを押し通す笑顔に、さとうは何も言えなくなる。無言のさとうを、美咲は了解と受け取った。

美咲は周辺をうろついた歩いた後、階段を上り戸の前に立つた。どうにか中を覗こうとするが、真っ暗で見えそうにない。

やはり、封をやぶるしかない。

美咲はお札の前に手をかざした。札を取ろうといつのだらう。

しかし、手はとまつたままで、動かない。心の中で、封をといつとする者と邪魔する者が戦つているような、緊張感が漂つた。

さとうはどうにかして美咲を止めたいのに身動きができず、祈りながらただ見守つた。

空気が、張り詰める。

やがて美咲は動きだし、無言のままお札を取つた。

戸が開いたわけでもないのに、さとうは反射的にぎゅっと目を瞑

つた。

あんなに固く戸を閉ざしていたお札は、たいして力もない美咲の手で簡単に剥がれてしまった。

お札がなくなり、これで中に入ることができた。それなのに、さつきまであんなにしゃいでいた美咲が大人しい。自分は何か取り返しのつかない、恐ろしいことをしてしまったのかかもしれない。

漠然と、美咲は不安を感じていた。美咲はどちらかというと怖がりで、本当は森に入つてからずっと怖かったのに、何故あんなにしゃいでいたのだろう。

「さとるちゃん、戸を開けよう」

美咲がさとるを呼び、さとるは青い顔をしたまま何も言わず美咲の傍まで来た。

二人は、恐る恐る戸を開けた。

祠の中は外よりもなお暗い。

しかし見てみると、2畳程度の広さに腰の丈ほどの中の装飾のついた台のようなものが置いてあるだけで、中を物色するほどの中もなかつた。

考えていたような恐ろしい物はなかつたが、そうとわかつても足を踏み入れる勇気が出さずに、二人は立ち尽くす。

先ほどから鳥肌がおさまらない。さとうは不吉な空気を肌で感じ、知らぬうちにこぶしを握り締める。

風が高い音を鳴らして、背後の森を揺らした。それは警笛のよつであつた。

さとうはこんな恐ろしい場所を早く抜け出したかつたが、それは祠にはいつて、駄々をこねていい美咲を満足させるしかないのだ。さとうは、覚悟を決めた。

「……はこるぞ」

美咲の返事も聞かずさとうは足を踏み出した。古い板がきしみ音を立てる。そんなことさく飛び上るほど、さとうは恐ろしかつた。中は簡素であつても、押しつぶされそうな圧力を感じ、息苦しい。見えない大きな力が一人をつぶそうとしているようだ。

恐ろしいと思うのは気のせいだ、落ち着こづ、そう意識しながらさとうは台に近寄り中をのぞいた。

これを見て、そうして美咲を引っ張つて帰るんだ。

さとうは恐怖を押しこめて、早く帰ることだけを考えて動いた。入り口からは暗くてよく見えなかつたが、台上に短剣が納められていた。剣は、祠の中で薄く光を放つていて見えた。

さとうは引き寄せられるように、短剣を手に取つた。短剣は軽く、さとうの手によくなじむ。

「さとうひやん」

美咲がいつの間にか、台の裏側に回り込んでいた。しゃがんでいるのか姿が見えず、声だけが耳に届く。

「箱が置いてあるよ。隠してあるみたいだね。また紙が貼つてある」  
美咲の声は無邪気だが、上ずつていて何か空々しい。

嫌な予感がして、さとるは止めようと近寄った。

しかし、もう遅い。

紙を破く音が、祠に響いた。

「美咲つ」

さとるが美咲を呼ぶのと同時に、箱が開かれた。

「きや」

美咲が小さく声をあげる。

箱を開くと、大きな風が起り、祠が揺れた。

風と共に咆哮がどこから運ばれてくる。

小さな祠の中に風が渦巻いて、立つのがやつとだつた。

さとるは目を開けられないほどの強風から体を守ろうと、必死に踏ん張つた。本当は耳をふさぎたかった。咆哮に心臓が締め上げられていくような状態で、今にも倒れてしまいそうだった。

どんどん咆哮の数が増し、さらに笑い声が重なり、嵐のように森がざわめく。なにか悪しき宴が始まるような様相であった。

さとるは風にあおられ、下を向いていた。何かが起るといふ、恐ろしい予感に顔をあげられない。

「……もう、帰してくれ」

涙を流しながら、気が付くとそここぼしていた。体の震えが止まらない。恐怖と緊張が体を支配している。

風が吹き荒れ、咆哮が大地を揺らす……まさに地獄のよつだつた。

「帰りたい」

下を向いたまま、涙を流して全てが収まるのを待つた。

早く過ぎ去ることを、ただただ祈つた。

ふいに風が止まつたので目を開けると、肩がずしりと重くなつた。

反射的に目を横にやると、とてつもなく大きな顔がそこにはあつた。

ぎょりとした田が、さとるを見ている。

さとるは声もあげられないまま、それから田を逸らせずにいた。

『マズハ、オマエヲ、喰ラオウ』

地の底から響くような声を聞き、さとるはそのまま氣を失ってしまった。

祠の田から時が経ち、さとるは何事もなく日常を送っている。同じような毎日を送る中で、祠の出来事も記憶からなくなってしまった。

毎日さとるは掃除や風呂焚きなど、家の手伝いを熱心にやつた。それがさとるの仕事で、やらないと食事がもらえないのだ。さとるの食事は毎食、苦い薬草のスープで、いつまでたつても味に慣れない。ないよりもまじだと思いながら飲むが、腹はいつも満たされず力が入らない。

それでも毎日必死になつて生きた。祠の出来事は記憶から薄れていても、生きていくつとうつ強い気持ちがさとるの奥に密かに芽生えていた。

### 3 変わらない

『変わらない、あの日から何も変わっていない』  
さとるは呪文のように毎日その言葉を口にした。

水を汲み、火を起こし、石を運び、薪を割っている間もずっとつぶやいていた。

「変わらない……何も、変わらない……」

突然さとるは手を止めてうずくまり、それから急いで場所を移動して吐いたが、胃液しか出なかつた。もう丸々一日、ご飯を食べていない。毎日こんな風だ。空腹のまま、倒れそうになりながら働いていた。

「やつと、全部、終わつた」

仕事を終えたさとるは道具を置いて、自分の食べる食事を作った。水に薬草を入れて、長時間煮込む。自分で作っているのだから好きなものを好きなだけ作る、というわけにはいかない。決まったものを決まった分量で作るよう決められているのだ。それを破ると、恐ろしいお仕置きが科せられる。

黙つていても絶対に見破られる、さとるはそう頑なに信じていた。さとるは大きな石に持たれながら、うつろな目で鍋が煮立つのを見める。湯気が立ち上る様子を、さとるは見るともなく見ていた。

「あの日から何も変わらない……変わらない……変わらない……」

煮込み続けて、スープが出来上がつた。

「変わらない……変わらない……」

さとるはよろめきながら鍋に近づき、汚れた皿にスープをよそつて、汚れたスプーンで口にした。

他の人間なら顔をしかめるような、青臭く味のないスープだったが、さとるは夢中で食べた。

腹を満たすような量があつたわけではないが、スープを食べ終えたさとるはさっぱりした表情をしている。

気分が良くなり、良いことも嫌なことも何もかも忘れてしまった。事実、さとるは知らないが、この薬草にはそういう効果があった。

片付けまで終えると、口が暮れて辺りは真っ暗になっていた。遠くから誰かのなき声や咆哮が聞こえる。

恐怖に足をつかまれそうだったが、さとるは耳をふさいで全力で走った。

「変わらない……何も変わらない……」

夢中で走り、ようやくたどり着いた。

息を切らしてさとるは部屋にはいり、錠を下ろして寝転んだ。土がむき出しで肌寒かつたが、疲れていたのですぐに寝つてしまつた。

『「じーは、じーだ』

さとるは木に囲まれた場所にいた。見たことがあるがわからない。しかし辺りを見渡すが、全く見当がつかず、立ち尽くす。

『……ちゃん。……ちゃん』

誰かを呼ぶ少女の声がこだまする。しかし、じーにも姿が見えない。

『誰だ』

さとるの声は震えている。

『私は、美咲。あなたは、誰?』

『僕は……僕は……僕は、誰だ』

さとるは田を覚ますと、辺りを見渡した。壁と格子に囲まれた、いつもの部屋だった。鍵はまだ開いていない。

「僕は、誰だ」

両手を開き田の前にやる。手は汚れて黒くなつていた。

「僕は、誰だ……。僕は……。忘れなれば、忘れないければ。変わらない……何も、変わらない」  
さとるは震える声で、唱え続けた。

錠が上げられる音がして、さとうは田を覚ました。

戸が開いている。一田の始まりだ。

さとうは今日も水を汲み、火を起こし、石を運び、薪を割る。

「変わらない……変わらない」

そして呪文のように、言葉を繰り返す。

確かにそれらはさとうにとつての田常になりつつあった。

「変わらない、変わらない」

しかし田を逸らしたままの田常が、続くわけがないのだ。

「変わら……」

『あなたは、誰?』

声が聞こえたような気がしたが、見てみてもやうの周りには誰

もいない。気のせいだ。

しかし、心臓が音をたててさとうを急かす。

思い出せ。

思い出すな。

忘れる。

思い出せ。

全て忘れてしまえ。

思い出せ。

『オマーラ、クラウ』

「ひいっ」

さとうは手に持った石を放り、その場にしゃがみ込んで震えだした。

「ずっとずっと、何も変わっていない……変わらない、変わらない、  
変わらない、変わらない、変わらない」

空でカラスが鳴いた。それを合図にさとうはふらふらと立ち上がり、仕事を続けた。西田からとめどなく涙が零れ落ちる。

「変わらない……変わらない……」

さとうは口を運び終えると、薪割にはいった。

「変わらない、変わらない、変わらない」

氣を失いそうになりながら、仕事をすべて終えて部屋に戻った。

『……ちやん。……ちやん』

またしても、同じ夢を見ていた。少女の声が一じだます。さとうはすでに恐怖に震えていた。

『誰だ、帰つてくれ！帰れ！』

さとうは耳をふさいでしゃがんだが、声は脳に響くよつと続いていた。

『ねえ、あなたは、誰？』

『知らない！そんなの知らない！』

『あなたは、誰？』

『つるさい！どこかへいけ！帰れ！』

『帰りましょう。私とあなたのおりか。お母さんとお父さんの元へ……』

田を覚ますと、錠が上がる音がした。

「僕は、誰だ……？」

夢うつつのままさとうはつぶやき、その後はつとめて起き上がつた。

しかし、時すでに遅し。

さとうの体は見えない力で持ち上げられ、運ばれた。

空間が歪み、出口も入り口もない部屋に放り込まれる。

壁面すべてふさがれているのに、ほのかに部屋の中が見える。壁にはびつしりと、般若のように恐ろしい顔がならんでいて、全ての顔が呪文を唱えだした。

さとうは全身に痛みを感じ、首を絞められていくように息苦しくなり、もうだめかというところで見えない手はゆるめられる。助か

つたと想つとすがに苦しへなる。わとなは痛みと息苦しへの中につた。

「ぐるしごつ！助けて！助けて……！」

その中でわとなは狂つたように叫び、絶叫が部屋に響き渡つた。

わとなはとうとう氣絶してしまつた。

同時に、部屋を埋め尽くした顔が消えて、静寂が戻つた。静まり返る部屋の中、さとるに近づく影があつた。

『カイ……カイ……』

女は呼びかけながら、わとの頬をさわつた。  
『待ちくたびれた。早う、田を覚ましておくれ  
それだけをつぶやき女はどこかへ消えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2008w/>

---

鬼の森

2011年10月10日03時27分発行